

員の立場から更に社会教育へ大きく役立つところとなつた。

小学校教員となつて八年を経た昭和十八年岐阜県から若冠二十九歳の田中氏は満蒙開拓青少年義勇軍の幹部職員たる中隊長に任命をうけて二百三十二人の訓練生を指揮統率して訓育に当たつた。

もとより岐阜県知事から激励をうけ、加藤完治所長の訓示を骨身に徹してそのまま実践された田中氏は、終戦後の混乱にあつても、更にソ連の暴虐無類の不法行為の真つ只中にあつて終始捨身の信念を貫き、引揚者の面目をほどこした戦乱の記述を刻明に書き証してあることは全く貴重なものである。

日本敗戦、満州国瓦解ががにあつて敗戦によつて既に個人個人が自由奔放となり、一人生き延びようとする中であつて、中隊長であつたという責任観念で隊員を無事引き揚げさせたことは言語につきせぬ功勞である。

運よく引き揚げてこられて岐阜県の教員に復職し小学校、中学校の校長に、次いで土岐市の教育次長の重責に就任して、退職後は推されて市農業要員に選任さ

れ、市の家庭相談員に委嘱された。もろもろの功勞が、県知事や外務大臣の表彰を受章。現在、県海外引揚者会常任理事として活躍されており、敬意を表してやまない。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

ああ痛恨の第九次徳命開拓団

岐阜県 所 みゆき

はじめに

苦難統きの在満四年六カ月の生活も空しく挫折し、ふるさとの安八郡輪之内町へ引き揚げ、ホツとする間もなく、養老山麓の西小倉の原野に再び開墾の鋤をふるう厳しい生活を始めなければならなくなった。

同志は、团长森田文吉さんを中心として、北安省徳命開拓団の仲間十二世帯と、龍江省と三江省の開拓団からの二世帯、その他の三世帯の計十七世帯が、原野

を開拓する労ばかり多くて、報いられることの少ない耐乏生活が続いた。ただ大きな理想と希望に燃えて、大陸に根をおろそうとした四年半の労苦の空しさを嘆くことすらできず、生きていくための追いたてられるような気持ちの毎日の生活が続けられた。

滿蒙開拓団への入植

主人は、昭和十四年現役入隊し、二カ年の兵役を終え除隊、故郷の揖斐郡春日村に在って、将来への生活設計を思案していた。当時の国策に呼応し、滿蒙の地に民族協和の理想に燃え、長兄に家業を託し、勇躍壯途につく決意を固めていた。

当時、主人より先に岐阜県各地から志を同じくする若者が、同年三月、可児郡春里村の開拓訓練所へ入所し、約一カ月の訓練の後、四月徳命開拓団の先遣隊として、団長の森庄兵衛氏と、農事指導員の酒向明氏と隊員十八人は、県庁において壮行会を受け、敦賀港を出航した。

主人は、五月北安省綏稜県瑞穂訓練所に入所、原住民農場にて約八カ月の現地訓練を受けた。

昭和十五年三月待望の入植地の北安省徳群県南和村地区に入植し、現地住民の家屋を仮宿舍として共同生活に入った。

十二月に補充先遣隊十人が入植し、このころから建設資材の購入により、本格的に個人家屋の建築を始め八戸を完成した。

治安が十分でなかったため、入植以来、農作業より警備による安全確保が、重要な日課であった。

十二月半ばころから急に気温が下がり、零下四〇度にもなり、生きていく厳しさを思い知らされる毎日であった。

昭和十六年二月主人を含む本隊三十八人が入植してきて、いよいよ団は活気を帯び、組織が強化され、事業計画もようやく軌道に乗ってきた。

四部落の部落編成、団本部、医療、畜舎、倉庫、共同宿舍、幹部住宅の建築を始め、在滿国民学校、個人住宅二戸建てが三十二棟、給水施設四、煉瓦工場などが完成されていった。

六月植木校長、柴田次席、十月に安藤畜産指導員を

迎えた。

昭和十七年には、徳命神社の建立、乳牛の導入、陸軍貸与馬四十五頭も配置された。

大陸花嫁へ

戦局緊迫の時節、郷土の安八郡輪三内の生家に在って、農家を手伝っていた私は、十八歳を迎え結婚の適齢期を迎えるようになったが、身の周りにいた人たちは入隊、応召されていくため、男性の姿を見ることはできなくなってしまう。

折しも大陸の花嫁募集の国策に応じようと決心をした。当時は満蒙開拓団として大陸に雄飛する若者の勇姿にあこがれていた私も大陸の花嫁となる覚悟を固め、岐阜県にその旨の希望を届けることにした。

入植三年後、開拓団の生活基盤がようやく軌道に乗るかかってきたころ、主人が所属していた七五三部隊は緊迫する時局にあつて、伴侶を得て一層の開拓団員としての生活基盤をかため、また、時局柄再び軍籍に入った。後事を託するためにも大陸の花嫁候補者を求め、岐阜県にその希望を伝えていた。

国策に沿うためにという双方の希望が縁となって、同年二月に主人と結ばれ、満蒙の地に入植することになった。

緊迫する時局

食糧統制令により、生産体制がまだ整備されないままに、国策に協力するために、乏しい収穫を割いて出荷をしなければならなくなった。

昭和十七年十一月、忘れることのできない悲惨な事故が起きてしまった。それは穀物出荷のための輸送の帰途、猛吹雪のため方向を失った内田喜作氏が凍死して帰らぬ人となって、悲しみの国葬が行われたことである。

しかし、このような尊い犠牲者を出しながらも悲しみを越え、自分の命をつなぐ食料を割いて、出荷命令の達成に懸命の努力が続けられた。

昭和十八年に入ると、開拓団も更に厳しい戦時態勢に入ってしまった。多くの若い団員も次々と召集令状がきた。現役を除隊した主人にも召集令状が来るのも必至であった。

厳しい開拓団の生活の中で、柱を失った生活を想像して夜も寝られない不安に襲われる日々であった。

両手を失っていく開拓団の運営は、統合の絆も弱体化し、各部落ごとの運営の主体が移ることになってしまった。作付面積や出荷量の割当てや、道路の改修や個人家屋の早期完成の負担が、増加するばかりであった。

昭和十九年、時局はいよいよ緊迫し、戦時体制はますます強化され、団員の七割が応召され、残された少年と老齢の団員で、留守中の運営に当たった。出荷もその減量方を徳命県に陳情しながらも、齒をくいしばつての達成に努力した。国民学校の伊与部校長と森川医師も交代され、その心細さは一層増すばかりであった。

昭和二十年二月ともなると、男子の団員全員が応召され、開拓団の運命は闇夜に燈を失った極限状態の生活に陥っていった。

軍司令部よりこの非常態勢による説明があり、同年六月七日には全く男子不在の状態となり、団の運営機

能は停止状態となり、留守家族の食糧事情もますます悪くなり、今さら開拓団を閉鎖することも故郷へ難を避けることもできず、進むことも退くこともその力すら失い、団の指揮をする者もなく、ただ座して悪化をたどる運命の流れに身をまかせるよりほかならなかつた。

緊急退避

昭和二十年八月三日、開拓団本部と国民学校の校舎に、各部落の婦女子全員が集結し、各部落別の集団生活が始まり、緊迫する空気の中に、事の成り行きを心配しながら、不安な毎日を送っていた。

その生活も五日間が過ぎたころ、ソ連軍の進攻のうわさがひろまり、どんな事態になっても、関東軍の精銳は日本人の生命と財産は守り抜くと、森開拓団の团长が徳都県庁より帰つての説明があつた。一同不安な中で、明るい希望が開かれた感じがして、再び各部落へ帰宅することになり、その準備に取りかかり、一部の気の早い人は既に帰宅した者もいた。

ソ連軍の侵攻

明けて九日の午前九時、重戦車を先頭に約二十人ほどの武装したソ連兵が突然現れた。

昨日の森開拓団長の明るい報告の翌日に突如の出来事に驚天動地の極みとなった。

銃をつきつけて、「全員両手を上げ、本部前の広場に終結せよ」と命ぜられ、なすすべもなく、ただおろおろするばかりであった。

ソ連兵は銃の先で強制的に男と女を区別し、わずかばかりの十五歳以上の男子は全員浮虜となって引つ立てられて行った。

個人家屋は一軒残らず侵入して調べられ、婦女子は追い回され、逃げまどう団員の前で暴行を受けた。

見るに忍びなかった電話連絡係の立岸菊夫さんが軍刀を抜いてソ連兵を阻止しようとして、直ちに射殺された。婦女子は実にこの世の地獄の惨劇を目にしなればならなかった。婦女子が肩を寄せ合って恐れおののく前を、まだ子供と思われる男の子全員が、戦車の前を三列になつて歩かされ、その両側を武装したソ連兵が囲み、本部前から北安街に向けて移動して行った。

暴徒の襲来

ソ連兵の姿が見えなくなつて三十分ほどすると、満人の暴徒の一団が、私たち婦女子に襲いかかり、暴行を受けることになり、その惨状はまた実に言語に絶する修羅場と化した。

個人家屋の家財道具の一切は略奪され、このような乱暴は夕方近くまで続き、暴徒は喚声をあげながら去つて行った。

団長の逃亡

この暴動で、隠れていた森団長が見付けられ、満人から半死半生の体になるまで暴行を受けてしまった。

一同が身を案じて「死人のまねをさせよ」と事務所の中に寝かせ、顔に白い布をかけ枕もとに線香を立てて、再度の来襲に備えた。

その夜、団長は逃亡して行方が分からなくなつてしまった。統率者を失つた婦女子に、昼夜の別なく、暴民が次から次へと代わつてきては襲いかかつてきた。

被害が増し、生命の不安が深まる中で、婦女子は互いに「いざ」という最後を迎えたとき、自決をしよう

と相談が決まり、手榴弾と青酸カリが配られ、自決の覚悟を固めた。所持していたお金は全部集め、各戸の先祖の位牌も集めて火を付け、最後の食事を作った。

逃避行への出発

この暴動は三日間も続いた。婦女子は恐れおののきながら、家においても飲むことも食べることもできず死を待つばかりの生活であった。

三日目の夕方、学校前の警備道路を徳都方面より南下する日本軍の兵隊を見つけた。

私と立川静子さんが、私たち婦女子の同行を依頼したところ、「我々は捕虜であるから連れては行けぬが、今夜は先の部落で一泊することになるだろうから、後からその部落へ来たら……」と言われた。

私たち婦女子は、これを頼りに日の暮れるのを待って、夜の道を互いに励まし合いながら、兵隊の後を追って、部落にたどり着いた。兵隊と話をしている内に、ソ連の兵隊にとがめられ、日本兵と婦女子を別々にされてしまった。

高橋まささをさんは病気で歩けず、便所へもはって行

く状態で、連れて行くことができないために、家族の勧めで自決させ、そのまま置き去りにして出発することになった。

このときは、寂しさと悲しさにくれる暇もなく、兵隊さんより先に出発するようになると言われ、追い立てられるように部落を出た。

この出発に際して、満人の「老・李」という人が、握り飯をたくさん作って、私たちの道中の食事にと渡してくれた。この親切と好意にあふれた顔は、地獄で会った仏で、一生忘れることはできない。

私たち婦女子の一団は、白旗を先頭に警備道路を南下した。途中満人の暴行を受けたが、幸い後続する日本の軍隊に助けられ難を逃れることができた。

地獄の中の逃避行

北安まで南下する七里の道中、これまた雨季のため、ひどい悪路となり、弱い私たち婦女子は、素足での歩行は困難を極めた。

その上、空腹で七里の道を一歩掛かりでようやく北安街にたどり着いた。

貧しく名ばかりの北黒旅館で疲労のため、空腹をも忘れ、倒れるようにして眠りについた。

ここでの生活は、食糧を口にする方法すらもなく空腹の生活が十三日間も続くことになった。

この間、日本人会からの連絡があり、新京まで南下する計画と、新京での設営費として各家族より三千元の拠出をし、団員二人が先遣隊として出発して行った。

八月三十日、北安を列車で出発した。婦女子一行二百五十八人、引率者は馬湖浜一氏であった。この列車が南下する途中で、幾度となく停車させられ、暴徒の略奪、暴行、強姦に遭い犠牲者が続出した。

この地獄の逃避行の道々で、嫌というほど思い知らせれ、悔やまれてならなかったことは、敗戦国民としての惨めさ、命を削られるような苦しみ、悲しみは、国が敗れてその権力は失われ、やむを得ず異郷の地に捨てられてしまったのだ。

飲まず食わずの十日間の列車の中での悲惨な苦難が続いた末に、やっと新京に着いたのは九月十日の午後であった。

同日、新京の日本人会の指示を受け、白山国民学校に到着し、ここで五日間の宿泊の後、寛平大路の東崗寮に移動した。

新京へ設営のために先発した二人の団員が、私たちのための設営の準備が完成しているものと期待していたのに、新京のどこにもそれらしい場所も、二人の団員の姿もなかった。徳命開拓団本部を出発してからの二十八日間の生活は、略奪、暴行、殺人、その上に飲まず食わずの、この世の地獄図であった。この間、二歳の幼児を連れ、更に身重の身で、この一カ月近い苦難の極限の途を喘ぎ喘ぎ乗り切ってきたのであった。

二人の幼な子と弟の死

九月十六日からの東崗寮の生活は、身を刻むような逃避行の後だけに、一応住むことについては安定した。食の方も不安ながらも日本人会からの支給で、一人一日の分量は茶碗二杯で、これ以外は個人で賄うほかなかった。

十月十四日は、それは忘れることのできない悲しい運命の日となった。

命からがらの厳しい逃避行の後に訪れた束の間のやすらぎの中の悲しみの一日であった。

主人に託された幼な子の命は、どうあっても守り抜きたいと懸命だったのに、幼な子と弟は栄養失調で体力の衰弱が激しくなっていた。またこんな中で生を受けた未熟児の命の母乳が出ないまま、やせ衰えた小さい体から、泣き声を出す力もなかった。手当ての方法も医療もなく、生気を失っていく、二人の顔色だけを見て、オロオロするだけの毎日は、居ても立ってもいられない毎日であった。

この日、子供は朝から弱々しい眼がうつろになつてきたので、私の胸に抱いて、死んではならないと折るだけであつたが、この折りも空しく、火の消えるように命は失われ、体が冷たくなつてしまつた。

その傍らに寝ていた弟も、もの言わぬまま冷たい骸となつてしまつた。

満蒙の開拓の尖兵となるんだと、幼い少年の夢を抱いて渡満してきた弟、志ならずして敗戦を迎え、苦しい逃避を体験しなければならなかつた弟、肉体的にも

厳しい生活の上に恐れおののいた精神的な苦痛は、この幼い三人の命を削り取つてしまつたのであろう。

幸になかつた三人を失つた悲しみと悔しさは、私の心の張りをなくさせ茫然自失に追いやつてしまつた。

思わぬ主人との再会の喜び

終戦の直前、妻子に思いを残しながら、現地召集されて出征した主人は、間もなくソ連軍の侵攻により捕らわれの身となり、シベリヤへ抑留される列車の人となつていた。

幼い子と、身重の妻の身を思うと、居たたまれなく、広野をばく進する列車より身を投じ逃亡の決意を固めたそうだ。身の危険を案じ思い止めようとした戦友の手を振り切り、持てる物を体と頭に巻き、飛び下りたときの衝撃を和らぐようにして、窓の外へ身を躍らせた。失神するばかりの激しい衝撃はあつたが、幸いに負傷することはなかつた。

開拓団を逃れた妻子が命を落としてなければ、引揚げの人々は新京に集結するであろうとの推測をもとに、新京をめざして、幾度かの身の危険を避けながらの強

行軍を続けた。

ようやく新京にたどりつき、日本人会を訪ね、徳命開拓団の妻子が宿泊する東崗寮を知り、奇しくも、幼子と弟の死んだ翌日の十月十五日の夕刻、運命の再会の日を迎えることができた。

夫婦が手を握り合い再会の喜びにひたる間もなく、主人の第一声は我が子の安否を聞き先日の悲しみの死を知ると同時に、郊外の原野へ埋めた屍を掘り起こし、我が子の死顔を見たいと、止めるのも聞かず狂人のように墓地へ走り出した。

墓を掘り起こし、布切れに包まれた我が子を見た主人の慟哭の声は、夕暮れの原野に遠くまで響き、二人の涙はとめどなく流れた。

十月二十五日、日本人会からとぎれがちに続いていた少ない食料の配給が、この日をもって打ち切る旨の通知があった。

支援打ち切り後の生活

頼みの綱だった日本人会からは、力もつき果てて支援打ち切りの通達を受け、今後の生活について全員による

協議が行われ、個人単位の生活に切り替えるか、それぞれ奉天まで南下するか、又は今までの延長として団の共同生活を続けるか、議論百出したが、諸般の事情をいろいろ検討の結果、今までの共同生活を続けることに決定、十月二十七日からの生活設計の計画を実施することになった。

(一) 責任者は森田文造氏、副責任者を山本長一氏、事務を林陽子さんを選出した。

(二) 収入を得るための出稼ぎ計画として、満人の農家の農作業の調査と依頼

(三) 作業賃や得た農産物の配分や集金

(四) 朝礼で婦女子の出稼ぎの希望や家族の事故の有無を調査

(五) 死者の埋葬作業の当番制とその手続

(六) 日本人会との連絡事務

(七) 毎日の食料品の調達と炊事当番の割当て

(八) 越冬に備えての夜具などの準備

わずかいる健康者でその日の作業を行い、事務女子一人、満人農家との交渉係一人、病人の看護女子五人、

死者埋葬及び運搬を六キロの道を五人、強制使役を男子三人、食糧調達三人炊事当番女子五人、雑役二人、出稼ぎ十人内外と、共同生活を維持するための計画と活動は大へんな苦勞であった。

悲惨続きの共同生活

毎日の人員割当てと作業が続いていた二十八日間の地獄のような生活は、各自の健康は日に日に衰弱の度を増し、程度の差はあれ全員が栄養失調となつて表れ、二十一年三月の始めころまでに、大人四十九人と子供は実に八十二人も犠牲者を出した。

シラミの猛烈な繁殖で、発疹チフスにかかる者は多く、その上、病名のわからぬ死者も出て、見るに耐えぬ悲惨な有様であった。

季節は冬期に入り、気温は零下三〇度の酷寒は衣・食・住、共に耐乏生活による肉体的にも精神的に疲勞困憊しての越冬生活は、今も思い出しても身の毛もよだつ苦勞の生活であった。

しかし、こんな耐え難い生活の中に、共に苦勞を分かち合わねばと、自らの乏しい生活の中から、一枚の

衣料、一握りの食物を恵んでくださったやさしい同胞の気持ちは今も心に残っている。

いよいよ始まった引揚げ帰国

昭和二十一年八月、待ちこがれた引揚げが始まり、苦難に命を削り、体に刻みこまれた衰弱した体力と、散々と痛んでしまつた精神と感性、この中にようやく帰国を迎えることができた喜びを体いっぱいにとざらせながら、その準備に夢中になつていった。

命を永らえた者は帰国の喜びに沸き立つことができぬのだが、開拓の夢は破れ、自決した者、暴徒に命を奪われた者、病のため異郷の土に骨を埋めた病没者、いわれない銃殺の露と消えた犠牲者、戦死者、命がつかぬのを予測し、愛しの我が子を満人に託した悲痛な親、それすらもできず残留孤児の運命を負つた幼子など、運命の荒波に流され、この世の地獄を体験した多くの人々の苦痛と悲しみは、永久に忘れられないことであろう。

最終引揚者は、昭和二十八年九月まで続いた。

開拓の夢は無惨に破れ、徳命開拓団の総人口三百二

十五人中、自決者一人、銃殺死六人、戦死者七人、病死者は実に百十七人、行方不明者五人という尊い命を異郷の地に散らしてしまったことは、悔やんでも悔やまれない悪夢を見る思いであった。

悲惨を乗り越えて得た幸せを

苦難続きの生活のため、すっかり死を迎えるばかりに衰弱し切った私は、夫の必死の励ましと、いたわりに守られ、今の命と体を保持できた喜びと報恩の気持ちで、病に倒れた夫の看病をさせていただいた。現在は、死去した夫の霊の供養に勤めている。失った幼子の後に、その後は再び子宝に恵まれることはなかった。亡き主人と幼子の供養のため、仏縁に恵まれ、僧籍に入る幸せを得て、徳命開拓団から引揚者で、再起の西小倉の開拓団へ入植した同志の方は、一軒残らず異郷に骨を埋めた方を供養される方ばかりで、その供養のお手伝いをさせていただいています。

また残留孤児の引受け業務のお手伝いをさせていただいたり、内地へ帰国した後の生活相談や、満州の地に渡り残留孤児を捜し出し、帰国しての肉親捜しのお

世話をさせていただくよう努めています。

今は恩讎しんを超え、過去の罪を償う気持ちを持ち続けることも供養の一つであろうと思っている毎日です。

今は幸せ恵まれた日々

同志と再起の開拓は、労のみ多く報われることのない労苦だが、高度成長の波に恵まれ、近郊の都市へ、副収入を得る途を見つけ、サラリーマンと開拓の二人三脚の途を求めた。

サラリーマンの収入がよくなるにつれて、開拓への努力は減退していく中で、好況の波は宅地造成と建売住宅のブームを招来し、次々と開拓の土地を手放し、代わりに住宅団地化し、今は育牛の一軒のみを残し、開拓の面影は完全に消滅してしまった。

決死の逃避行と、幼児と弟の死と、引揚げ後健康を害し、十年余りも病床にあった間、今は亡き主人の献身的な看護のお陰で、すっかり回復することができました。

主人も五十年ごろより開拓の苦勞を断念し、水道工事店を開店しました。転業の苦しみも数年の間に軌道

にのり、その後、実子に恵まれないので、相談の上、私の弟を養子に迎え、家業を継いでくれることになりました。

その後、家業は順調に発展し、業界のリーダー格にまでなり、妻帯もさせました。

残念なことに、やさしかった主人は健康を害し、十日余りの療養生活の末、昭和六十二年五月一日、家族の温かい看護を感謝しながら死去してしまいました。私もかつて主人の介護を受けた恩に報いたいと懸命の努力の末の死別でした。その亡き主人の加護があった、私は七十一歳の今日まで健康で仏縁に恵まれ、同志に請われるままに、参詣めぐりの旅行ツアーの世話で、毎日忙しい日を送っています。

会社役員の報酬と年金に、何不自由ない気ままな毎日を喜んで、老人介護、残留孤児の世話、開拓団員や家族の供養と、ボランティア活動を体の続く限り続ける覚悟の毎日です。

孫二人、曾孫二人と、私をいたわってくれるやさしい弟夫婦に囲まれて幸せな毎日です。

遙かな来し方を振り返り、恩讎を超えて苦勞は忘れ、良き思い出だけを大切にしていきたいと考えている毎日です。

【執筆者の横顔】

養老山麓の扇状地の松林、荒涼の原野に満蒙開拓団からの引揚者が、終戦後間もなく入植してきた。松林を切り開いてできた畑は、酸性の強い黒ボコの土地で大豆やサツマイモの生育を許さない。厳しい自然は労働ばかり多くて報われの少ない農作業であった。

所氏は、満蒙開拓団西小倉の再入植の同志の中でも終始リーダーとして、団員団結のかなめの役割を果たしてきた。

高度成長の波にのって開拓の努力を断念するの止むなくに至り、今は住宅団地と変ぼうしていったのは、自然の成り行きであった。

引揚げの逃避中も、生活再建の中にあっても、所夫妻のいたわり合い、助け合いの夫婦愛は見る人の羨望と敬愛の中心であった。

実子死別の後は再び実子に恵まれなかつたご夫妻は、みゆきさんの弟さんを養子に迎え、家業は発展し家族運にも恵まれていった。

ただご主人が病床に就いて八年間、みゆきさんやご養子夫妻の手厚い看護を喜びながら他界された。

その後のみゆきさんは、再び満蒙の地を訪れ開拓当時の現地の旧知の人々との親善に努めたり、現地に死没された方々の供養塔の建立や、残留孤児の発見や、肉親捜し、帰国後の就職や生活相談など、八面六臂の活動は多くの人々の感動と感謝の的となつた。

亡きご主人や弟さんや幼な子の供養にと、信仰の道を究め真言宗の得度を受け僧籍を得て、満蒙の地を訪れた際に持ち帰つた土を埋めて慰霊碑を建立して、同志の供養や同好者の寺院めぐり、聖地めぐりのツアーの世話や老人ホームでの看護など、その活動は七十一歳の老いを感じさせない、多くの人の驚きと敬愛を集めている。

(岐阜県引揚者団体連合会)

養老郡支部長 安田 高

引揚げ作戦の舞台裏

岐阜県 古路 喜一

昭和八年ごろ、第二師団司令部に軍属として勤務していた父が退職し、奉天市鉄西にある満州麦酒(株)に就職、十年に仙台と奉天との二重生活に別れを告げ、家族で渡満した。

母は下関を離れるとき、再び本土の土は踏めないかもしれないと思うと、あふれる涙でトラップを濡らしたとか。

私の就学については、学齢は三年生程度であるが、無就学とあつて一年に編入ときまり弥生小学校の生徒となつたが、学業は適当、宿題はやらぬと決め、学校帰りは寄り道をして露店商と対話、三カ月で片言、六カ月で子供語りができるようになり、ますます楽しい毎日であつた。

昭和十五年奉天商業に入学したが、十八年のある日、